

俺の愛人に手を 出すな

***** お題「抗争」 枝湊 彦 *****



Line-mojito

MIKASA



Tropic sunrise

MINUET



「もうミカサくんを逃がさないよ」
男の顔はすでに変態を通り超して
いた。

びたりと唇に吸い付き男を興奮さ
せていた。

「可愛いね。吸い付きちゃってくば
くばしているよ。本当は欲しいんだ
ろ？」

「うっ……」

俺は顔を横に向けた。



Pink dream

MICHAEL



Sour shot

HYOGA

GROUP



裏面に取り囲まれあの金髪の外国人の指示がな
いと俺は用務所行きかもしれない、そう思っ
た。

「ふぁーミカサくん逃げ出そうなんていい度胸
だね」

俺は裏面に連れられベッドまで戻る。

「悪い子にはお仕置きかな？」

「……悪いけど今日も仕事があるので」ときっ
ぱりと斬ると金髪の外国人は大きな声で笑って
いた。

「アハハハ、もう結局ミカサくん俺の女になっ
て」

「嫌です」こちらもきっぱりと断った。

「くくく……まふミカサくんが嫌でも俺は違
い始めて君を愛人にしようかな」

「早くいをされたが俺は金髪の男を認め付け
た。

「次もその目を涙まかせて犯したいよ」

都内某所のとある Bar でその男は店員をひっくり返していた。

「ぶはあっーおいおい Bar の店員が呆れるぜ」

接客を担当していた全員、キューンとお酒を飲み過ぎて倒れていた。

その様子を店長と掃除をしていた俺ことミカサが見ていた。

「おいおい、まじかよ」

店長は呆れて頭に手を置いていた。飲んだくれの男……金髪の外国人は悠長な日本語でペラペラと悪態をついていた。遅く入った俺は現状を確かめるためにテーブルの上を見ると高級酒のピンが何本もあり、そりゃー度数が強く潰れるのも無理はない。接客といえど話し相手のイケメンホスト的な存在なのだから。客を酔わせお金を払わせるのが目的だ。すでにスタッフたちはそれをやり遂げていた。それでもまだ外国人は酔ってさえないのか酒を持っでこいとまでも言う。

「なあミカサちゃん悪いんだけどホール入ってくれない？」

掃除当番である俺にホールを勧めてきた。今日は楽な仕事と思ってきたのにホールに入ってあの外国人の相手をしないといけないなんて嫌すぎる。

「嫌ですよ、今日は掃除……」

「ん？ どうしたの？」

タブレットに注文されたのは俺の相手とでも言える酒の種類だった。

「ふん、ノツてやろうじゃないの」

「ミカサちゃんありがとう」

「店長、今日はホール分も入れておいてくださいよ」

「もちろんだよ、ハグしちゃう」

「それは結構です」抱きつかれそうなところを避けた。

俺はボトルとグラスを持ち外国人の元へ向かった。

薄らとあけた瞼の中にはコバルトブルーの瞳を持っていた。派手な金髪と指には宝石を散りばめた指輪。そして豪華なネックレス。これならどんなに

ボトルを開けようと払えそうだ。

「おや、お兄さん綺麗な顔をしているね」

「お客様、ご注文ありがとうございます、この後はミカサが担当いたします」

そう言い一緒に来たスタッフに潰された人達を回収させた。

「ミカサくんか、いい名前だ」

注いでいる時にさえ尻を撫でられた。

「お客様、こちらそういう店ではございませんので」

俺は注意のために作り笑いで接した。

「なんだ、連れないな」というと身を寄せてきて耳元で「俺のをここにぶち込んで犯しまくりたいんだけどな」と言ってきたのだ。

こんの変態外国人め。無表情になりながらさらにこう告げる。

「先ほど申しましたがここは……」俺の言葉は遮られた。

「わあってるよ、二度も振られたくないからな」

「そうですか」

ああー疲れる。

しかし俺の相方のボトルは男を酔わせずにいた。

はあ……はあ……なんだこの男、俺が一番この店で強いのにそれ以上だと！！ しかももう三時間もぶっ通しで飲んでいるのに……。悔れない。

「お兄さん、体の関係持たないか？」

俺が酔っているのを良いことに肩に腕を回され身動きを封じられる。さらに耳元で問いかけられる。

「このまま君を拉致して俺の寝どころに連れて行きたいよ」

ぐっ……。くそっこのままじゃ俺も落ちる。うつらうつらしていると店長が来た。

「あのお客様、申し訳ないのですがそろそろ閉店の時間でして」

「ああ、そんな時間か、なあ店長さんよ、このミカサくんもらってもいいか？」

「えっと……」

俺はこくりこくりと頷いてしまっていたので店長は勘違いしたのであろう。

「はいもちろんでございます、でお会計は……百三万でございます」

「……そんなもんか、日本の酒は安いな」

「ええ！　そうでございますか？　またのご来店をお待ちしております」

そう聞こえた気がした。だが俺はゆらゆらと肩に担がれている気がした。

目の前に止まる車に乗せられ車窓が見えているが抵抗なんてことはできない。俺はどこかへと連れて行かれた。

豪快に開けられたドアはその反動でしまった。

「さてとジャパニーズボーイの味はどんなかな？」

ベッドに寝かせられふわふわしている中で金髪の男は服を脱ぎ……！？

俺は慌てて起きた。

「おや、眠っていたんじゃないのか？」

「はあ……はあ……あんた、俺になにをして……」

服を脱いだとたんタツパのある体付きと筋肉がなんともかつこい……じゃなくて色気が溢れていた。

「ん？ 君みたいな子を食べられるなんて俺も幸せだよ」

「はあ？？」

「あれ？もしかしてミカサくん男とはやったことがない？ いかにもやったことがありますような綺麗な顔をしているけど」

「……今はやってない」小さい声で答えた。

「ん？ なんて言ったのかな聞こえるように言ってくれるかな？」

「……絶対に言わない」

「そうか……困った子猫ちゃんだ」

酔わされ起き上がれないことをいいことに俺はいいように扱われていた。

「んひっ……」

性器を吸われ、蕾に指が這い中をこれでもかと拡げられる。

「うーん、やっぱり初めてなのかな？ それともご無沙汰かな？ なかなか拡げられないね、まあ俺ので拡げてもいいんだけどね」

「うっ……やめっ」

「ダメダメ、やめてとか嫌だとかは逆に煽り言葉なんだよ」

「……知らなっ」

ぐちぐちと中を拡げられる感覚は懐かしいとも言える。酔っているからか体も熱いし……早くこれが欲しくなる。

「おや、おやおや？？ やはり君ここ初めてじゃないね」

そう言うのと腰を持ち上げられ蕾を指で拡げた。そして口が開き舌が入ってきた。

「うっ……んっは!？」

べろりと入ってきた舌は円を描くように内壁を舐められていた。そしてその横から指も出入りして最悪な気分になる。

「はあ……はあ……まじでやめてください」

「ん？ 君は本当に綺麗だな」

綺麗……綺麗と言うけど整った顔つきってだけだ。美少年や美男性でもない。なのに男はすでに入れる体勢になっていた。

「まっそれを入れるんですか？」

「ん？ そうだよ」

そうだよって軽く言うけどバカデカイんだよ!! 直径四センチいや六センチくらいはありそうだし、長い……。入れただけでも奥壁通り超して結腸入るんじゃないか？？

「もうミカサくんを逃がさないよ」

男の顔はすでに変態を通り超していた。

ぴたりと蓄に吸い付き男を興奮させていた。

「可愛いね、吸い付いちゃってくぱくぱしているよ、本当は欲しいんだろ？」

「うっ……」

俺は顔を横に向けた。

「まったく強情だね、でもミカサくんの歪んだ顔を拝めるのであれば俺はここにゆっくりと入れてあげるよ」

腰と足を持ち上げられ男の性器はゆっくりと挿入してきた。

「……」

俺は絶対に声を出すのが嫌だったから唇を噛みしめていた。

「まったく、君は強情だ」と耳元で言いその唇は俺の唇に合わさり性器も

徐々に挿入された。

……やはりデカイ……お腹圧迫されるのが早いし、そこから先は……ひっ

……。

口内を犯されたまま性器は出入りを繰り返していた。

「んんっ……」

苦しいのにお腹の圧迫が逆に気持ちがいい。ダメだ、思い出してしまいうあの頃の俺を……。

「ん？　なんだミカサくん足を腰に絡めちゃって俺の気に入ってくれた？」

「はあ……はあ……ちがっ……」

「まあでもいいや、俺は嬉しいよ」

パンパンとあからさまな音を鳴らす男は激しく出入りを繰り返していた。

「はあ……はあ……んああっ」

思わず喘いでしまい腕を噛む。

「どうして？　いいんなら喘いでくれたほうが俺も気持ちいいんだけど」

「ふはっふざけっ」

「ふん、本当にいいな」

正常位から四つん這いにされ奥を抉られる。

「はあ……はあ……んぐっ」

奥深くに入られる度俺の内部の襞はぐぶぐぶと音を変えていた。

「はあ……はあ……」

「本当に君頑固だね、それを解すのも俺は好きだからいいけど」

根元まで抑えつけぐちぐちとゆっくりと動いていた。きつともう少し体を傾ければ結腸に入ってもおかしくない。

「今さ、多分ここまで入っていると思うんだけどミカサくんってこの先も味わったことあるの？」

背中を指でなぞり性器の後を辿っているのかそう言ってきた。

「んぐっ……」

言うべきなのか、言わない方がいいのか少し分からない。

でもきつと〈ある〉と言え、書き換えるような気もするし〈ない〉と言え、ば新しい想い出作りとか言われそう。逃げられないと思うとどうすべきか。

「なんだ、だんまりか、なら」

男は俺の片足をあげ横向きにされた。

「これで前触りながら君を追い込もうかな」

そうきたか……。予想外だ。冷静な俺はそう脳内で呟いた。

横を向いたとしても気持ちいいのは変わらないし前を触られているからさらに気持ちがいい。

こんな知らない男にいく姿を見られたくなかったが我慢の限界だ。

「おっと……どうした急に？ お尻キューって締めつけちゃって君は本当に可愛いね」

やばい……いく……。

「んっひっ……」

ビクンと持ち上げられていた足が折れベッドを汚した。

「ちよつとイク時は言つてよ、俺驚いて中に出しちゃったよ」

「はあ……はあ……くそっ……」

「でも君、イク時可愛いね中也締まるしなにより顔と体で表現してくれるなんて君の虜になっちゃうなあ」

「はあ……はあ……」くたつとベッドに体を預けその後のことは覚えていない。

朝方。横で眠る男を無視してバーテンダーの服を取り着替え出て行こうとしたら警報がなった。

「は??」

ウーウーっと大きな音は男を目覚めさせたのと知らぬ黒服が入ってきた。

「なに!？」

黒服に取り囲まれあの金髪の外国人の指示がないと俺は刑務所行きかもしれない、そう思った。

「ふぁーミカサくん逃げ出そうなんていい度胸だね」

俺は黒服に連れられベッドまで戻る。

「悪い子にはお仕置きかな？」

「……悪いけど今日も仕事があるので」ときっぱりと断ると金髪の外国人は大きな声で笑っていた。

「アハハハ、もう最高ミカサくん俺の女になって」

「嫌です」こちらもきっぱりと断った。

「くくくっ……まぁミカサくんが嫌でも俺は追い詰めて君を愛人にしようかな」

顎くいをされたが俺は金髪の男を睨み付けた。

「次もその目を歪ませて犯したいよ」

そう言い残し俺は解放された。結局あの男の名前を聞きそびれてしまった。

「ミハエル様簡単に帰してしまってもよろしいのですか？」

「ああ……ああいう子は少し首輪を緩めておいたほうが後に楽しみがあるかな。でも見張りは付けておけ」

「御意」

ミカサくん、ああは言っていたけど俺のを簡単に飲み込んでいく体は興味がある。さぞ男を抱いた数も多いだろうな。後ろを向かせて騎乗位で出入りを見るのは楽しいだろうな。くくくっ……。また会えることを楽しみにしておこう。

続きは本編にて！

お 題「抗争」試し読み版
タイトル【俺の愛人に手を出すな】

著 者：枝湊菰 文庫
発行日：2025 年 2 月 9 日

転載・転売禁止